

令和8年度第1回葉山町総合教育会議 会議録

- 1 開会年月日 令和8年7月15日（水）
- 2 開会場所 保育園・教育総合センター 会議室
- 3 出席委員 町長 山梨崇仁
教育長 稲垣一郎
教育長職務代理者 小峰みち子
委員 鈴木伸久
委員 下位勇一
委員 清水衣里
- 4 出席職員 教育部長 虫賀和弘
教育総務課長 植草恵美
学校教育課長兼教育研究所長 大黒貴文
生涯学習課長 黒田二郎
発表者 上山口小学校統括教諭 大窪昌哉
- 5 議長 町長 山梨崇仁
- 6 書記 教育部長 虫賀和弘
- 7 開会 午後2時00分
- 8 閉会 午後3時52分
- 9 協議事項 (1) リタリコ教育ソフトを活用したSELの授業実践
(2) 葉山町立学校の教員の業務量管理・健康確保措置実施計画について
(3) その他

（開会宣言）

教育総務課長） それでは、ただいまから令和8年度第1回葉山町総合教育会議を開会いたします。
時刻は14時ちょうどです。

総合教育会議につきましては、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第1条の4第1項の規定によって設置され、同条第3項の規定により、町長が招集することとなっております。

また、本会議は、地方公共団体の長と教育委員会という対等な執行機関同士の協議及び調整の場という位置づけになっております。会議において調整がついた事項については、それぞれが尊重義務を負うものの、地方公共団体の長と教育委員会の執行権限の一部を会議に移し、この場で決定を行うものではないため、決定機関ではありません。また、地方公共団体の長の諮問に応じて審議を行う諮問機関でもないことを申し添えます。

ここで、本日の配付資料の確認を行いたいと思います。

まず最初に会議次第、続きまして、通常学級におけるリタリコ教育ソフトを活用したSELの授業実践、葉山町立学校の教員の業務量管理・健康確保措置実施計画、以上となります。

過不足等ございませんでしょうか。

(リタリコ教育ソフトを活用したSELの授業実践)

教育総務課長) それでは、会議次第に沿って進めさせていただきます。

協議事項に入ってまいります、本会議は、葉山町総合教育会議設置要綱第4条の規定により、町長が招集し、その会務を総理することとなっておりますので、これ以降の進行を山梨町長にお願いしたいと存じます。

それでは、山梨町長、お願いいたします。

町 長) よろしくをお願いいたします。

では、初めに傍聴人の確認ですけれども、本日傍聴人はいないということでよろしいですね。

それでは協議事項としましては次第のとおりでございます。

協議事項1、リタリコ教育ソフトを活用したSELの授業実践、協議事項2、葉山町立学校の教員の業務量管理・健康確保措置実施計画についてでございます。協議事項については以上2点ですけれども、皆様からよろしいでしょうか。

はい。よろしいですね。

それでは、次ですけれども協議事項の(1)から入ってまいりたいと思います。リタリコ教育ソフトを活用したSELの授業実践でございます。

それでは、本件につきましては、本日ご参加いただいております上山口小学校の大窪統括教諭からでよろしいでしょうか。大窪先生、私たち、ご存じでいらっしゃいますか。

大窪教諭) はい。存じております。

町 長) 教育委員の皆さんも。

よろしいですね。では、特に紹介等を行わずに入ってまいりたいと思います。それでは、協議事項1のご説明をお願いしたいと思います。

大窪教諭) では、よろしくお願いします。

では、上山口小学校の大窪です。よろしくお願いします。

私からは、昨年度、通常学級におけるリタリコ教育ソフトを活用したSELの授業実践ということでお話をさせていただきます。多様性を包摂する授業実践という副題をつけさせていただいたんですが、これに関しては、最後に少し触れさせていただきたいと思います。

まずリタリコ教育ソフトについて少しご説明させてください。子ども一人一人の「個別最適な学び」と教員の「業務負担軽減」を同時に実現するインクルーシブ教

育プラットフォームということで、株式会社LITALICOさんが作られている教育ソフトを葉山町では導入していただいています。これを活用して、今回授業をしました。

まず、学校現場が直面する特別支援の課題として、急増する支援ニーズ、これに関しては、発達特性のある子どもが増えているというよりは、その理解が深まって、支援を要する子どもたちへの理解が深まってニーズが増えているというふうに考えています。

また個別の教育支援・指導計画をつくる必要がありますので、その計画作成に膨大な負担がかかっております。

ノウハウや教材の継承難ということで、毎年担当者が入れ替わってしまうこともありますので、つくったものが個人個人に依存してしまって、それがなかなかスムーズに引き継がれないという課題が特別支援教育ではあります。

最初にお話しさせていただいたように、これはインクルーシブ教育プラットフォームなので、当然、特別支援教育のために、中心に作られた教育ソフトなんですけども、この内容が通常学級でも十分活用できるんじゃないかなということで、リタリコの担当者と協力をして、今回授業実践をつくりました。

まず計画実践から研修まで支えるリタリコの三つの教材というものがあります。まず一つがまなびプランで、多角的なアセスメントをすることによって、その子どもの特性に合わせた個別の指導計画を作成することができます。またまなび教材といって、3万枚以上の厳選されたプリント教材がありますので、これを活用しながら授業をしたりすることができます。まなび動画に関しては、今回まだ活用できていませんので、今回この二つについてお話しさせていただきます。

リタリコのまなびプランなんですけども、一人一人のふだんの生活から、質問に幾つか答えていくと、こういうふうにアセスメントがレーダーチャートや図、あとは文言になって出てきます。ふだん私たちが子どもと接している中で、ふだんの僕らの感覚で、子どものこういうところに困り感があるなとか、こういうところをもう少し支援してあげる必要があるなというのは、かなり感覚値のところが多くて、それを共有することがなかなか難しいんですが、リタリコのこのまなびプランですと、こういうふうにレーダーチャートで、不注意のところはこのくらい困り感があって、例えば友人関係ではそれほど大きく困り感がないですよというのが目に見えて分かることができます。これを6年間、中学まで含めると9年間、共有を続けることができますので、なかなか全員を入力するということは難しいんですけども、支援が必要な子に関してはこういうことを入れることで、まず理解が深まるということと、その子に合わせた教材を選ぶことができるので、かなり効果が高いのではないかなというふうに思っています。

次にSELについてお話しさせていただきます。社会性と感情の学びと言われる

S E Lですが、S o c i a l E m o t i o n a l L e a r n i n gの省略です。これからの時代に最も求められる「非認知能力」を体系的に育む教育アプローチです。

まず、なぜ今、S E Lが重視されているのかということですが、認知能力を支える土台になるというふうに言われています。I Qに対してE Qというふうに言われたりするんですが、心の能力ですね。

まず一つは、テストとかの点数のI Qを適切に上げるためにも、自己管理能力とか、協調する能力がまず必要だというふうに言われているので、自分の認知能力を上げるにも土台になりますし、例えば社会に出たときに、学習をずっとやってきて、認知能力は高いんですけど、なかなか周りと協働することができなくて、仕事がうまく回らない人がいたりすると思うんですけども、その両方が、今、必要だよねというふうに言われているので、それをS E Lで育めたらいいなと思っています。

あとは、心のスキルを科学的に学ぶ、感情のコントロールだったり、他者への共感などは、もちろん学校の中で、生活の中で養っていくんですが、育んでいくんですが、これを体系的な学びによって意図的に育むことができるというふうに言われています。なので、感情は育むことができるということを、授業の中で取り組むのがS E Lの授業です。

S E Lが育む三つのアプローチで、まず自分と向き合う自己理解ですね。自分の感情に対する理解。他者とつながって社会的認識・人間関係をつくる、他者理解をベースにした人間関係。そして賢い選択をする、責任ある意思決定をするという、この三つのアプローチをS E Lで育んでいきます。

昨年度、3年生ですので、3年生ではこの二つを中心に授業の中で、子どもたちに育む力として考えました。

まず一つ目は、自分と向き合う自己理解、自己認識の力と、もう一つ、他者とつながる他者理解なんですけども、まだ回数もそれほどこなせてはいないので、他者理解といっても、他者の感情を理解するというよりは、他者が自己理解したことを知ることによって、他者の感情の捉え方というのは様々なんだなということに気づくような授業を心がけました。

ここは簡単に。なぜ小学校期から導入なのかというのは、保育園、幼稚園が多様な教育のプログラムだったり、考え方を持っている中で小学校に入ってくる。そこでの初めての経験だったり、初めての葛藤の中で、小学校の間からS E Lを導入する必要があるんじゃないかと考えています。もう一つは、脳の急激な発達が小学校期に起こりますので、そこでしっかりと感情について学んでおくということは大事なことだと考えています。

小学校でS E Lに取り組むことによってもたらされる三つの教育的価値なんですけど、これ繰り返しになってしまうんですが、学びに向かう、自己コントロールを含

めた学びに向かう力の向上だったり、あとは、他者理解による協調性や共感性の育成、そして、困難を乗り越えるレジリエンスについてです。特にSELではネガティブな感情は悪いものではないんだよというのを扱います。自分にとって不快な感情というのは必要な感情で、それを上手に付き合っていこうという考え方を伝えるんですが、そういうときに、困難を乗り越えるために、ネガティブな感情にのまれず、自ら適切に立ち直る力を育んでいきたいと考えています。

ではここからは、昨年度、3年生のクラスでSELの授業を、リタリコの教材を使って実践したものを少し紹介させていただきます。

ちょうど3回目の授業を、小学館のみんなの教育技術に取材していただいて、すごく分かりやすくまとめていただいたので、それを中心にお話しさせていただきたいと思います。

主題は、「自分の心と仲良くなろう～気持ちの温度計と心のスイッチ～」ということで、1時間目は「ヤバい」の中身を探検しようということで、実は「ヤバい」という言葉を気軽に使っているんですが、これはネガティブな意味でも、ポジティブな意味でも使っているんですね。そこには必ず、使った人の感情だったり、受け取る人の感情が、ポジティブだったりネガティブな感情があるので、いろんなヤバいの言葉を一つ使っても、いろんな感情の語彙があって、それぞれの感じ方があるんだよということを学習しました。

2時間目は気持ちの温度計で、本当に紙に温度計を書いていくんですが、こういう、嫌なことがあったときに、自分はどんな感情になって、その温度計はどのくらい上がるのか。実はこれをやってみると、感じる感情だったり、その感情の温度というのは人それぞれ違うということを、他者との違いを、個性を認めるという狙いで授業しました。

今回この3時間目の、自分を助ける「心のスイッチ」についてお話しさせていただきます。

まず、このグラウンディングという、足をしっかり地につけて、目を閉じて、呼吸に意識を集中して、自分の感情に目を向けるワークから始めました。これに関しては、昨年度のクラスがなかなか元気いっぱい、授業が成り立ちにくい場面もあったので、音楽の時間、週2回あったんですけど、必ずこのグラウンディングから授業を始めていました。

その次にやったのが、漸進的筋弛緩法といって、何か最近あった嫌なことを思い出してもらって、そこから机をつかんでぎゅっと力を入れて、ぱっと離すと、そこから少し、筋肉が緊張したものが一気に緩められて、いらいらした感情が少しふわっと抜けていくというのを体験してもらいました。

その後、このガストンのきぶんととのえる本ということで、怒りたくなったらやってみて、このガストンがいろんな感情に、怒る感情だったり、悲しい感情だっ

たり、うれしい感情になったり、このガストンの毛の色が変わるんですけど、そのときに、どう自分は心のスイッチを入れ替えるのかというのが紹介された絵本で、こんな感じで、子どもたちと一緒に読み聞かせをしてから、授業を始めました。

心のスイッチについて考えようということで、まず最初に話したのは、この怒りの火山を使って気持ちのコントロールを考えよう、これはリタリコの教材であります。レベル1はちょっといらいらしてきたな。レベル2になると、かなりいらいらが高まってきて、もう少しで爆発してしまう。レベル3まで行くと、もう判断力がゼロになってしまって、もう感情のコントロールが効かなくなっている状態ですね。人に当たってしまったたり、暴力を振るってしまったたり、暴言を言ってしまったりする状態です。なので、ここに意識的になって、レベル2まで来たら、何とか自分でスイッチを入れ替えて、レベル3に行かないようにしてみようということ話をしました。

自分の心のスイッチとは、これ、人それぞれ違うと思うんですが、ワークとして、休み時間に教室でAくんとみどりのペンを「かして」と言ったら、ダメと言われたので、「ケチ！」と言ったらケンカになった。このときあなたはどんな感情になりますかと、結構怒りということを書いていたことが多いんですが、さらにその怒りから、もう少し解像度を上げていって、これ子ども未来がっこうという、今年度、上山口小学校、昨年度から今年度にかけて、上山口小学校のSELの授業づくりに関わってくださっているところが作っている感情カードです。落ち着かないとか、ピリピリ、むしゃくしゃとか、怒っている、ムカつく、いやだ！、激怒、爆発とか、こういういろんな、ただ怒りの感情でもこんなにたくさん表現する言葉がありますよねという言葉の語彙を増やして、自己理解を深めるという活動をしました。

その中で自分の感情を理解しよう、それを言語化することで理解しようということで、このちょっと大きくしているんで、子どもたちはA4のワークシートなんですが、自分の感情に名前をつけて、キャラクターにします。その後、自分の感情を、心のスイッチを入れ替えるためにどんなことができますか。例えばさっきのグラウンディングもその一つです。筋弛緩法もその一つです。このリタリコ教材を使って、例えば深呼吸をすとか、水を飲むとか、誰かに相談するというのも心のスイッチの一つですよね。

これ、どちらもリタリコ教材なんですが、こうやってキャラクターをまず書いてみましょう、音楽を聞くも一つ、落ち着く場所に行くとか、絵を描く、大声を出す、相談する、深呼吸する、水を飲む、読書する、ストレッチするという例を出して、じゃあ自分のキャラクターを作って、そのスイッチについて考えてみましょうという形で、子どもたちにこんな感じで書いてもらいました。結構楽しそうに、みんな自分のキャラクターを描いていて、こんな感じで、それぞれ自分の心のスイッチを考えました。

最後に、例えばですけど、私は怒ったときとかに深呼吸するといいと言っていたので、これからは怒ったときにそうしますというふうに振り返りを書いてくれたりしました。

最後です。最後にまずリタリコ教材×SELで、リタリコでアセスメントすることによって、困り感を把握しやすいというのは、まずリタリコのすごく特徴としてあります。

また、ニーズに合った適切な学び教材が、このアセスメントからこういうことを、こういう教材が合っていますよという検索をすごくしやすくなります。その中で子どもたちが気づいたこととして、同じ状況でも人の捉え方は様々で、同じような感情でも、一人一人違うことというのを、今回気づくことができたんじゃないかなと思っています

最初にお話しした、多様性の包摂の第一歩として、それぞれ、私たちは同じような感情でも一人一人違うんだということに気づけたのではないかなと思っています。

実は今日も5年生でSELの授業をしてきたんですが、今日も別の子どもたちなんですが、別の教材で授業しましたが、人それぞれ感情が違うなということと、あとはふだんからなかなか自分の感情に目を向けていないので、こんなふうに自分って感じていたんだとか、友達はこんなふうに感じていたんだという気づきをしていたので、これは1回ではなかなか自分の中に落ちていかないと思うんですが、繰り返しやっていくことで、心の感情を育んでいくことができるんじゃないかなと思っています。

私からは以上です。ありがとうございました。

町 長) はい。ありがとうございました。

報告は以上でよろしいですか、ほかの皆さんからもよろしいですね。となります。

各委員からご意見をいただきたいと思いますが、何かございますでしょうか。はい、どうぞ。お願いします。

清 水 委 員) リタリコの活用については、文科省の年に何回か研究会のときにも、教育委員として参加して、導入しているという、2年前の会議でもお話をしたら、ほかの自治体の方も非常に興味を持っていらっしゃって、こういう事例をたくさん発表していただけると、すごく発信、共有して、困り事がある方、それ以外の児童のことは深く理解できて、1年ごとに今は担任制が、クラス替えがあって、上山口小学校はずっと一緒ですけども、先生が変わっても共有できるというのはすごくいいことだなと思ひまして。先生同士の共有はされているかと思うんですけども、このアセスメントに関して、保護者の方との共有というのはあるのでしょうか。

大 窪 教 諭) 通常級で、まだアセスメントを保護者の人と共有はしていませんね。

例えば、まだないですけど、これを使って、例えばですけど、支援級の可能性がある場合に、これを見て一緒に考えることによって、説明のレベルが伝わりやすい

ということはあるだろうなとは考えていますが、まだ具体的に使ってはいないですね。可能性はあるとは思っています。

清水委員) 分かりました。ありがとうございました。

大窪教諭) もう一つ、今言われた共有に関しては、校内で作った指導案と教材とスライドは校内でも共有していて、今年さらに何本か増やそうと思っています。ほかの学校で、今年は長柄小でリタリコの担当者さんが学校に入って、授業づくりに伴走したいというふうに言っていたので、今度それがほかの学校で作ったものを各学校で、グループ内等で共有できるので、そうすると、いろんなこの授業のシステムを選んで、うちのクラスでやったものがこれだなというふうにできるかというふうに思っているので、これを進めていきたいなとは考えております。

清水委員) ありがとうございました。以上です。

町長) 他にいかがでしょうか。

小峰委員) 小峰です。よろしくお願いします、ありがとうございました。大変いい試みの授業をなさったなというふうに思っております。

今は通常級のお子さんの中でも、やっぱり認知にゆがみのあるお子さんって、かなり、かなりという言い方はおかしいですけども、少なくはないと思うんですね。そういう子も含めた中で、このような授業をされたということは、子どもたちの心の安定を自分で見つけることができるという意味では、大変有効な授業だったなというふうに思います。

今、ほかの先生方も教材等を共有できているということなので、ぜひどの学年でもね、1年に1回はこの取組をしていただきたい。幾つもの教材があれば、数回やっていただくのはいいことだなと思いました。

大人で言えば、大人にとっても必要な、いわゆるアンガーマネジメントなどと言われるようなことで、必要だと思います。私も現場に、まだ教員だった頃に、こんなにいいものはできなかったんで、自分たちでソーシャルスキルカードみたいなものを使って、授業参観でやったりとか、あるいは保護者との懇談会のときにこれを使って、例えば怒っているという絵があって、どうしてこの子は怒っているのかとみんなで考えたり、そういう中で、じゃあ怒らせないようにするにはどうしたらいいかというのは、大人にも考えてもらったりするために、使ったことがあったんですね。そうすると、大人も、何でか分かんなかったんだけど、よく考えてみたら、自分の行動が相手にこういう結果を与えることになったとか、あるいはこういうふうにすれば避けることができたとか、怒ってしまったらこういう謝り方もあるねとか、そういうことに気づける機会になったということもあるので。子どもたちの授業だけじゃなくて、いろんなところに広める可能性というのはたくさんあると思います。

リタリコさんでやっているアセスメントというのは大変有効なことで、対象人数が多い場合、やるのは大変かもしれないけれども、やっぱりやったらやっただけの

価値はあると思うので、時間がかかっても、ぜひ先生方に取り組んでいただきたいことだなというふうに思いました。

多様性の包括というのは、授業を1回やっただけでは、なかなか子どもたちに浸透しにくいと思うんだけど、大事なのは、先生方がそういう意識を持って子どもたちを見たり、学級経営をしていったりということは、小学校で6年間、中学校の3年間、9年間かけていくことで、他の子どもたちに対する偏見というか、そういうものがなくなり、自分たちも同じような感情を持つ人間同士の集まりなんだということを認識できるのかなと思います。今回、先生の実践が雑誌にも載って、皆さんにたくさんの方に共有していただけたということは、本当に価値が高いことだなと思って、今日のご報告を受けました。ありがとうございました。

大窪 教諭) 今、お話しいただいたんですけども、まず授業に関しては、今年度、僕はCグループの学習指導研究グループにいるんですけど、研究グループのメンバーが先行して、今年もう5本作ろうとしています。今日2本目をやったんですが。その研究グループの僕ともう一人が授業を先行してやって、学校の中では1人1本でいいので、今年1回やりましょうということを伝えています。

もう一人の先行している担任が、5月の授業参観で保護者の方と一緒に今の授業と一緒にやりました。もう一つはカードがあるんですけど、カードは今、保健室に置いています。ちょっと困り感があって来た、ケースで来た子どもが、自分の感情を言葉で表せないのが、カードを並べて、今どの感情に近いと言うと、これとこれとこれというふうに言ったりするので。そうですね、本当に今おっしゃっていただいたように、多様な使い方が、いろんな使い方ができるので、頑張って学校で取り組んでいきたいと思います。

小峰 委員) ありがとうございます。

町 長) ほかにいかがでしょうか。

下位 委員) とても分かりやすい報告ありがとうございました。この時間にまとめるのがすごく大変だったと思います。すばらしかったです。

私、会社を幾つかやっているんですけども、毎年新しい社員の方が入ってきて、特に最近の若い方は、人の気持ちを考えられない人が多いかと思っていて、それは普通に働いているときには分からないんですけど、何か例えば、プライベートであったときとか、あとは、一緒に何かチームで仕事しなきゃいけないときとかに、相手の気持ちを考えていないなという人が結構いると思います。それが、今の教育がいい悪いという話じゃないとは思いますが、そういう方が今すごく増えているなと感じていて、私は今、52 ぐらいなんですけど、もう 25 年ぐらい会社をやっていますけど、前はそんなことなかったと思うんですけど、最近特に多いなと感じているんですよね。

なので、もしかすると今みたいな取組が功を奏して、また新しく出てくる子ども

たちが、ちゃんと人のことを考えられる子どもになっていくのかなと思いつつ、今、葉山のスクールポリシーでも、自ら学び考えて行動できるとなっているんですけど、どうなのでしょう。今の大学生とか、息子も大学生なんですけど、親が敷いたレールのとおりに歩いてきていて、学校もそうですけど、塾に行って、勉強して、いい学校に入ってという子たちが、自分で考えることをしないんですよね。そういう子どもがいい大学を出て会社に入ってきたとしても、やってと言ったことはやってくれるんですけど、何も言わないと何もやらない、ぼーっと座っているだけみたいな人が多いので、そういうところにつながってくるかなと。

あとは、社会に出ている人間として、学校はちょっと違うかもしれないんですけども、日本人ぽくない人が最近増えているような気がしていて、今、先生がおっしゃった人の気持ちを考えるとかというのは、多分前提として日本人の感覚みたいなのが必要とされていて、ほかの国の人のことを悪く言う意味はないですが、日本人って人の気持ちを先読みしたりして、相手に不快な思いさせないように行動することが多いじゃないですか。それができない人がすごく多いような気がしていて。そういうところも、もしかしたら学校で、塾と違って、公立の小・中学校というような集団の中で行動して、勉強ももちろんしているんですけども、勉強じゃないことも、人と人との付き合いみたいな、大事じゃないですか。体育祭とか運動会とかそうだと思うんですけど。そういうところのモニタリングをもし活用できるのであれば、どんどんどんどん活用していつていただきたいですし、どうしても保護者、私も元保護者なので、学校に宿題をもっと出してほしいとか、中学校受験するから学校にこういう授業をやってほしいという方がいるかもしれないんですけど、そんなの、そんなのと言ったら怒られちゃうんですけど、そんなことは重要じゃないと思っていて、勉強なんかできなくてもいいから、人の気持ちを考えて、ちゃんと行動、行動というか会話ができる人、その上で勉強ができたなら、なおいいと思うので。そういう人をどんどん育てていつてほしいなというふうに思いました。ちょっとごめんなさい。取り留めのない話で長くなってしまったんですけども、ぜひこれからもつなげていただきたいと思います。

町 長) 先生からありますか。今のお話。

大 窪 教 諭) 今、お話あったのを僕も感じる部分があるんですけども、それってやっぱり、学校はもちろんそうなんですけど、学校と家庭と地域社会と一体だなと思っているんですね。当然、学校の役割もあるので、こういう授業をやっぱり一緒に考えていきたいというのが一つと、あとは、なかなか家庭の教育力みたいなもののところまで僕は手を出せないの、なかなかその家庭の教育力が苦しいお子さんに対して、教育活動を通してフォローができるんじゃないかなというふうに思っていますので。精進していきたいと思います。

町 長) 他によろしいですか。

教 育 長) お疲れさまでした。

大窪さんなので、もうほとんどこちらから何か偉そうに言うつもりはそもそもない。ただとにかく、現状ある教育資源としてのリタリコの教材をうまく使っていたらいい。もともとSELはね、非常に必要なものだというのはもう当たり前の話で、それこそ、6年前に、大黒さんにSELの本を見せたりとかしてね、教育していた、そういうものなんですけども。

大窪のペーパーの中にある教育の現状としては、三つ課題を出してくれている。急増する支援ニーズというのは、これは学校にとって、あるいは教員にとってこのニーズをまずつかめているのかというところが、すごくやっぱり重要ですよ。これをつかんだ以上は、じゃあどうするのがあって、後で話が出てくるところの、本当の意味での、いわゆる学力、学びという中のごく一部が学習じゃないですか。知的なところをどういうふうに伸ばしていくのか。学びという全体像の中のごく一部の学習に特化して、いろんなことをやり過ぎた結果として、もしかすると下位委員がおっしゃったような子たちが増えてきているのかもしれない。でも、これは別にエビデンスがあるわけではないけれども、実態として、今そういう形の物言いを言われていて、認知能力をどうするのという話に、どんどんどんどん話が上がってきている。この認知能力、最終的に言うならば何であるかという、これもペーパーの中に落とし込まれていました、認知能力を支える土台の中に、やり抜く力、つまりグリット力というのがどうやったら身につくんだろうというのを、一生懸命いろんな人たちが考えているけれども、そんなにすごいことを考えなくてもいいのかなというふうに、最近逆に思っていたりします。

大窪さんがやってくれているように、人の気持ちを分解することが、最近の人間、下手になっているので、それは言語感覚ともイコールですね。言語感覚が非常に下がっている。例えばそれは、旧Twitterで今Xのところで、非常に短い文字で全てを理解しろというふうに、強制的に物言いをしてくる人間たちが非常に増えていて、それで、最終的には相手が何を考えているのかという感情分解をしなくなっていくんですよ。なので、授業の中で、大窪さんがやってくれているように、いろんな気持ちが、実は、怒りにもいろんな気持ちがあって、それを言語化できるのか、たくさんいろんな怒りがある中でも、それは自分のどれに合っているのかなということを自分がマッチングしていくことすら、最近できなくなっている。そういうことを順番にやっていかないと、つまり早い話が、まあいいやになっちゃうんですよ。まあいいか、この程度という話になっていくと、イコール、グリット力がつくはずもないわけですよ。

いわゆる小学校段階のところからすごく重要だと思っているのは、こういうことをやっていただくことの中で、子どもたちは発達がみんな違って、一人一人、別に3年生だから全部同一3年生ではないわけで、それは一般的に今凹凸だという

言われ方をすることが非常に多いけれども、いや凹凸ですかねと思うことが非常に多いですね。もともとみんな違うので。それがあ意味では、学習評価の中では評価と言われるところに落ちてしまうけれども、そうではないことはたくさんやっぱある。

授業の中で、順番に、自分たちが楽しみながら、先ほど言ったいわゆる感情分解だったり、表現の分解であったり、いろんなことをしていく中で、自分自身がそれに少しずつゆっくりゆっくり向かい合っていくことで、やってみると面白いじゃんと最終的に思う。それが多分、やり抜く力、グリット力につながっていくということになるんだと思うんですよ。

そういう中で言うならば、グリット力はそもそもアメリカの心理学者のアンジェラ・ダックワースが言い始めた文言ですけども、とはいえ、それが日本の中に入ってきただけで、日本ってもともと日本の文化の中での学びというものは、アメリカナイズされた、ヨーロッパナイズされた学識とは別に、これをうまく育む土壌があったはずなんですよ。ところがそれがいつの間にか消えてしまっていて、だからこそ、欧米のロジックを導入しないと、そこが育成できなくなっているというのは、ある意味で本当に残念なことだと思います。

これもそうですけれども、結果的に、いわゆる、時々、私もここのところ使う、卒業式で中学校に行くと、必ず「正解」をみんなうたって、「正解」を聞くと涙するという何か構造があるんだけど、その構図は何であるのかというところにたどり着いていないんですよ。正解、嫌なんですよ、みんなね。だから中学校も、高校でも正解をうたう。結果、それ何という、決められたゴールにたどり着くために僕たちは生きて、私たちは生きているわけじゃないんだというので、そうだよなという、なんかオチがあるでしょう。だからあれはいいというふうになるんですけど。でも結果、それは保護者の方々と教員が何をしてきたかという、正解とゴールに向かわせるために、余計な手出しをいっぱいしてきた結果だと思っているんですよ。余計な手出しをするというのは、今回のところの絵カードみたいなものではなくて、正解にたどり着く一番最短コースをどう教えるかばかりに、もしかすると、教授者がそちらに向かってしまった結果、本当にそれは僕たちの年代が悪いんだと思っているんですけど。それをね、今、大窪さんたちがもう一回こんがらがった糸を一生懸命解いてくれているんだろうなというふうに思っているの。

根本的なところからいくと、やっぱり人はもう、そもそも様々であるというところの前提からスタートして、人は何を考えているんだというのは、違うことが当たり前で、こんがらがっているのが当たり前だとすると、それをどういうふうにひもといていくのかというのに楽しみを持ってくれるような子どもたちに育っていったほしいというのが実態ですね。

なので、SELの考え方のネガティブはイコール悪ではないというのは、それは

もう当たり前の話ですね、ネガティブシンキングは全部悪いんだ、ポジティブじゃなきゃ駄目なんだと。これまた大きなお世話であって、人によって違うわけですから、そのところも当たり前だと思っています。

レジリエンス力と言われる、いわゆる立ち直り力というものも、これも欧米思考の考え方なんで、全部立ち直るのが当たり前だというのも、これまた違うというふうに思っていたりもします。そういう中で、いろんな形で実践をしていって、上山口小学校で大窪先生を軸にしながら、核にしながらといったほうがいいのか。いろんな人たちが、これ面白いじゃんと思ってくれるから、多分そこに取り組んでくれていると思うんですよ。やっぱり社会で生きていくときにも、これから学んでいく、ずっと多分、最後の最後で、人間が最後に死ぬまで、多分学びは続くと思いますが、その間、何で学ぶかは、やっぱり面白くないと学ばないじゃないですか。それを学校の先生たちも面白いなと思って、日々のところの教材研究をしていただいていることには本当に感謝を申し上げたいという部分です。余計な話でしたが、ありがとうございました。

町 長) 鈴木委員、よろしいですか。

鈴木委員) 僕はあまりこの教材のことはよく分からないから。ただ、まず一つ言えることが、大窪さんのようにこの教材を使って、これをやったらこういういい結果が出ると思う教師がほとんどじゃないと駄目なんですね。要するに、当然、全てのものはそうなんです、やっぱり 40 人先生がいたら、極端に言ったら 40 人が皆同じ方向を向いていないと、私はなかなかできないんじゃないかということが一番気がかりかな。ただ、やっぱりやらなきゃいけないし、こういう方向でやっていくべきなんじゃないかなと。

それから下位委員が言われたように、その立ち直りだとかね、今の日本人の持っているものが変わってきたということについて、じゃあ、自分自身が会社をやって、なぜ成功したんだろうとか、何度も失敗してくるんですけど、何で立ち直れたんだろうかなというふうに、時々考えるときがあります。僕の答えは、やっぱり知り合いなんですよ。友人とか知り合いとかね。勉強ができたとかね、頭がよかったはあまり関係ないです。やっぱり人との付き合いの大事さの中で、仕事だけで言わせてもらおうと、それがやっぱり一番自分を支えてきたんだろうな。それがやっぱり立ち直ってこられたのは、運もあるんだとは思いますが、やはり知り合いなり、特に友人のやっぱりアドバイスなり、愚痴を聞いてもらったみたいなのところもあるんですけど。それが一番大きかったかなと。

じゃあ、学校で学んできた、小学校、中学校、高校、大学の何かが役に立って自分が立ち直ることができたかは、ちょっと思わなかったんですね。僕の場合の生き方だと、皆さんとちょっと違うところがあるので、何とも言えないんですが、僕はそう思っているの。学校で勉強するということは学生の一丁目一番地なんだと。

だけど、それと同じぐらい友達との関係、友達といろんな話ができ、多くの友達を知っているということが、最終的には自分の人生を助けてくれる一番の要なんだと、私は常に思っておりまして、ちょっと下位委員の言葉に乗っかっちゃうんだけど、どうも勉強だけやってりゃいいというわけじゃないんだというようなこと、その辺はちょっと同じ経営者として感じております。どうもありがとうございました。

町 長) はい。私は詳しくは見たことがないので何とも言えないんですけども。ただ、冒頭に鈴木委員がおっしゃったように、これを使う先生たちの意識を、先生すらもしかしたら、下位委員がおっしゃっているように、最近の若い先生はという認識で大窪先生もお感じになられている点があるとしたら、大変なご苦労があるんじゃないかなというふうに思います。

私もう少し広い視野で環境関係のサステナビリティーについて議論する機会があるんですけども、結構先が暗くてですね。こんなに暑いのが毎年毎年続いている、皆さんも地球って本当にもう厳しいんだなと感じられていると思うんですけど、こういうふうには人間社会も、ちょっと話が大きくなりますけど、昔の日本はという言い方が正しいかどうか。ご近所とか、日本人同士の節度とか、謙虚さ、控えるものが社会の包摂性を生んでいて、そこで我慢するがゆえに社会がうまく回る面があったり、自分を出さないがゆえに、みんなでうまく収まろうとする力が日本のよさだったんじゃないかというふうに感じる場面が多いんですね。欧米を決して非難するわけじゃないんですけども、今、これだけ長い時間、島国だったこともありますけども、島国だからゆえに、みんなでこう抑え合ってきたものが、今なくなりつつある。それぞれがそれぞれを発信していいんだ、楽しければ、いい方悪いですけど、楽しければいい。子どもに子どもが言うことがいい。何か過敏に過剰に期待するものがあるがゆえに、大人としての役割や日本人としてのよさを失いかけているんじゃないかというところを、様々な節から感じる社会の、私不安があるんです。この際、こうやっていただくと、よりそういうものに現場でダイレクトに接しられていて、子どもどころかその親、そして同僚の先生たち、若い先生たちに対しても、いろんな意味で、がっかりするとか、1人で頑張らないとと感じるところもあるんじゃないかと思っているのが、実はこの次の資料は、教員の先生のことがあったので、そのことを考えながらこの資料をざっと読んだんですけども。

あまり深い、議事録を取っているの、深いことは言えないんですけども、大丈夫ですかという気持ちで、ただ、こういった先生の取組こそが本当に大事で、以前秋田に行ったときに、飲み屋さんで秋田の中学校の先生たちがたまたま飲んでいて、すごいですねという話をしたんです。そうしたら、全部小学校のおかげだと言うんですよ。私はそこではっきり分かったんですけど、中学校というのは学習なんです。小学校こそ、こういう生きる力を学ぶ場面で、なので、改めて申し上げますと、この力こそが全ての日本のこれからをつくっていく、人間の素養の原点であると思うん

ですね。これはますます広がってほしいですし、頑張ってもらいたいという気持ちでいっぱいなんですけど、伝えたい気持ちでいっぱいなんですけども、正直言って、やっちゃいけない、何していいか分からない、先生の世界に踏み込んでいけない。いろいろ感じる場所があるので。先ほど、家庭教育に踏み込んでいけないといったような、私は学校教育に踏み込んでいけないとあるので、踏み込んでよければ、どんどん踏み込んでくれ、こうしてくれというふうに言ってもらえるということがむしろありがたいと思うことがありますので、ぜひコメントいただけたらと思います。

大窪教諭) 学校教育にどんどん来ていただいて、いろんな、今日も、僕はここに来て、すごく勉強になっているなというふうに感じているので、来ていただけたらありがたいなと思います。

上山口に僕は赴任して3年なんですけど、先ほど言われたような、その昔のよさみたいなものがまだ残っているなと感じるんですね。なので、それを子どもたちに伝えたいというのが一つあります。

もう一つは、職場の中でももちろん温度差はあります。ただ先ほど言われたように、僕も学び続けたりとか、粘り強く学んだり、取り組むために必要なのは、やっぱり楽しさと、仲間と一緒にしんどいときに支え合ったりとか、あいつとやるから楽しいよとか、こんなことが面白くて、子どもがこんな感動してさ、なんていう話ができる場が力になっていくなというふうには感じているので、僕の場合は、僕はこういうことにすごく興味もあるし、大事だなと思っているので、まず先行に行き過ぎず、先行したいなと思っています。その後ろに、少しでもいいから、何か面白そうなことをやっているからといって、ついてきてくれたり、子どもの、とにかくこの授業のときには黒板に書いて、一応、指導案も配って、見に来てくださいますと、今日も3人、4人、授業中、見に来てくださっているの、その子どもたちの姿を見て、これをやってみたいなと思ってくれたらいいなというふうに思っているの。あまり押しつけずに、いつでも開いて、一緒にやりましょうというふうにできるといいなというふうに思っています。

町長) ありがとうございます。いい先生方がいらっしゃいますね。

大窪教諭) でもチームとしては、いい、上山口小学校はいいチームになっていると思います。

下位委員) 引き続きよろしくお願いします。半分冗談ですが、上山口小学校が一番日本人らしいお子さんが多い学校だと思います。

大窪教諭) 僕も最初に異動したときに、昭和にタイムスリップしたかと思って、すごくいいところです。

町長) あと3校もあるんですよ。

大窪教諭) だんだんこっち寄ってきていただいて。

町長) 他の委員の皆様、よろしいでしょうか。

教 育 長) 大窪先生は、残念ながら逗子からお借りているので、1回向こうに返さなきゃいけないという宿命があるんですね。ただ、上山口で一生懸命やっていたので、逗三葉は一緒ですから、今は。もう逗子に戻っていただいて、今度は葉山で楽しかったことを逗子で広めていただいて。大窪先生の向こうでの弟子が、今度はまた葉山に来てくれると一番いいかなと思います。そのままこっちに戻ってくれるのが一番いいんですが。

町 長) 分身のような先生はいないんですか。分身というか、先生の意思をダイレクトに感じてくれていて、俺がやりますよ、私がやりますよみたいな先生はいらっしゃらない。

大 窪 教 諭) 先ほどこちょっと、その懇談会でやったりとか、一緒に進めている者はいるんですけども、残念ながら4年目で、市外に出ることが決まっている者です。

教 育 長) 過年度に1回、外に出なきゃいけない。

町 長) なるほど。分かりました。

大 窪 教 諭) そうなったら多分、次が来る……。

町 長) ほかによろしいでしょうか。はい、どうぞ。清水委員、お願いします。

清 水 委 員) 上山口小学校に、私も教育委員になって6年間毎年通わせていただくんですが、本当に空気が変わって、子どもの様子も変わってきていて、もう玄関を入った瞬間がとてもきれいになって。それが今回の教育視察でも、教育委員全員が言っているんですけども。先生たち、校長先生を含めて、先生たちが変わっていき、子どもたちが変わっているというのがすごくよく分かって、こういう授業を取り入れてくださった結果だと思うので、一度、ぜひ、町長をご案内したいなと思いました。ぜひ実際にご覧になっていただいたらいいんじゃないかなと思いました。

町 長) よろしいでしょうか。

大窪先生、どうもありがとうございました。この後、校内業務があるということで。お疲れさまでした。どうもありがとうございました。

(葉山町立学校の教員の業務量管理・健康確保措置実施計画について)

町 長) 葉山町立学校の教員の業務量管理・健康確保措置実施計画についてでございます。本件につきまして、学校教育課長大黒さんからご説明をさせていただきたいと思います。よろしくお願いします。

学校教育課長) よろしくお願ひいたします。

まず、大窪さんのSELの発表があって、感情の話がありましたが、私は今、すごくうれしい気持ちです。それは私がここにいるのは、先生たちがああやって、こういう授業にチャレンジしたいというような、その気持ちを本当に応援したい。この後の業務管理の計画にも関わってきますが、そういった葉山の先生たちのいろいろなチャレンジが生まれてきたことが、こういった場面で、町長にも見ていただけて

すごくうれしいですし、またリタリコ教育ソフトという予算をつけていただいているからこそ、生まれた実践だと思っていますので、そういったことにも感謝しながら、先生方の働き方について、この後、続けてご説明をさせていただきます。

大窪先生のように、なかなか上手に説明できないので原稿を読みながら。

町 長) 先生もまた違いがあるんですね。

学校教育課長) いいことを言わなきゃなという感情と、ああ苦手だなという感情がどちらもありながら。ちょっと座ったまま失礼します。

本日は葉山町立学校の教員の業務量管理・健康確保措置実施計画の概要と、本計画に基づく主な取組について、昨年度から今年度にかけて実施している内容を中心にご説明いたします。

まず本町では、令和2年に策定した葉山町立学校における働き方改革推進指針に基づき、D Xの推進、人的支援の充実、業務改善の仕組みづくり、学校外の資源の活用など、様々な取組を通して、教員の働き方改革を進めてまいりました。

まず、D Xの推進では、出欠席の確認やお便りの配信ができるC O C O Oの導入や、支援が必要な児童生徒のアセスメントや教材提供ができる、先ほどご紹介があったリタリコ教育ソフトの導入、留守番電話の整備などを行ってきました。

次に、人的支援では、県による教頭マネジメント支援員や、スクールサポートスタッフ、スクールソーシャルワーカーの配置に加え、町費によるI C T支援員、部活動指導員、特別支援教育支援員などを配置し、学校への支援体制の充実を図ってきました。また、学校閉庁日の設定や部活動ガイドラインの運用など、教員が休暇を取得しやすい仕組みづくりを進めるとともに、給食の公会計化や民間スイミングスクールの活用など、学校外の資源を活用した業務改善にも取り組んでまいりました。

その成果として、こちら資料にもございますが、令和6年度の月45時間を超える時間外勤務者の割合を神奈川県内市町村立学校の平均と比較すると、小学校では県平均 23.6%に対し、葉山町は 8.7%。中学校では県平均 39.6%に対し、葉山町は 30.9%となっており、県内でも良好な状況となっています。また、本町の令和6年度と令和7年度の割合を比較すると、中学校は 25.5%まで改善しています。一方、小学校では令和7年度は 13.2%とやや増加しました。これは昨年度発生した不祥事への対応が影響したものと考えています。なお、不祥事の影響が大きかったと考えられる学校についても、直近の5月時点では 7.9%となっており、現在は他校と比較しても低い水準となっています。このことから、昨年度の数値については、不祥事対応による一時的な影響が大きかったものと考えております。

一方で、教頭や異動して間もない教員、臨時的任用職員や新規採用職員など、経験年数や担当業務の状況により、長時間勤務となりやすい教員が一定数いることも課題です。また令和7年6月から7月に実施したストレスチェックでは、働きがい

があると回答した教員の割合は、小学校で公立学校共済組合平均 56.7%に対し、葉山町は 58.9%、中学校では平均 55.0%に対し、葉山町は 57.5%となり、いずれも平均を上回る結果となっています。

こうした状況を踏まえ、さらなる改善を図るため、昨年度末に葉山町立学校の教員の業務量管理・健康確保措置実施計画を策定しました。計画期間は令和 8 年度から令和 11 年度までの 4 年間です。本計画では、県及び市町村教育委員会共通の目標として、二つの目標を設定しています。

1 点目は、長時間勤務の是正です。月 45 時間、年間 360 時間を超える時間外勤務を行う教員の割合をゼロに近づけることを目標としています。

2 点目は、教員のウェルビーイングの向上です。働きやすい、やりがいがあると感じる教員の割合をそれぞれ 80%以上とすることを目標としています。

これらの目標達成に向け、国が示す学校と教師の業務の 3 分類の考え方を踏まえ、業務の見直しを進めてまいります。その中から、昨年度から今年度にかけて実施している主な取組をご説明していきます。

まず、学校以外が担うべき業務とされている、保護者等からの過剰な苦情や不当な要求など、学校だけでは対応が困難な事案への対応です。今年度から県のスクールロイヤーによる助言等でも解決が困難な案件について、学校や教育委員会に代わり、弁護士が代理人として、保護者等への対応を行う体制を構築します。なお、一般的にスクールロイヤーは学校への法的助言を行う弁護士を指しますが、本町が連携する弁護士は、代理人として実際に保護者への対応を行う点が一般的なスクールロイヤーとは異なることを補足させていただきます。また、昨年度からは、保護者や地域からの相談内容を適切に記録、共有するため、通話録音機能つき電話を導入しました。導入後は、この通話は録音されますというアナウンスの効果もあり、感情的な苦情が減少したように感じるとの声が、実際に教頭からも寄せられています。

次に、教師以外が積極的に参画すべき業務とされている I C T機器やネットワークの日常的な保守・管理についてです。令和 7 年度及び 8 年度予算において、I C T支援員の配置時間数を合わせて 212 時間拡充し、小・中学校とも週 1 回は I C T支援員が配置される体制としています。

部活動については、中学校教員の負担軽減を図るため、部活動指導員の配置時間数を拡充しています。また、県が示す部活動の地域展開の方向性も踏まえ、葉山町においても令和 10 年度までに、少なくとも一つ以上の部活動で休日の地域展開に着手できるよう、大磯町や秦野市などの先行自治体を視察しながら、検討を進めてまいります。

さらに、教師の業務ではあるものの、負担軽減を図るべき業務とされている、支援を必要とする児童生徒や家庭への対応については、特別支援教育支援員や全校に設置した校内教育支援センターに配置する支援者を確保するため、町費教員や校内

教育支援センター相談員の配置時間数を拡充し、人的支援の充実を図っています。

このほか、学校関係者だけでは気づきにくい課題を把握し、新たな業務改善につなげるため、今年度は学校業務改善推進事業を民間事業者であるユーレカトリーキーへ委託しています。こちらはユーレカトリーキーが作成した資料です。

葉山小学校をモデル校として、教員へのアンケートやヒアリング、実際の業務観察を通じて課題を整理し、教職員の負担軽減や余白を生み出すための改善策について、民間事業者ならではの視点やノウハウを生かした提案と効果検証を行います。また、他校へ展開可能な取組についても提案を受ける予定です。

なお、本事業では、発見や開拓を意味するDISCOVERYをプロジェクト名として掲げています。これは、学校の業務改善を単なる効率化として捉えるのではなく、課題を発見し、その解決に向けたプロセスそのものを前向きで創造的な取組として位置づけるという、ユーレカトリーキーから提案された考え方に基づくものです。このように、課題解決の取組そのものに名称をつけ、一つのプロジェクトとして、教職員とともに探究的に進めていこうとする発想や、進め方自体が学校の業務改善を前向きな取組につなげていく上でも、民間事業者ならではの考え方として、大変参考になるものと考えています。

健康確保の取組としては、引き続き、ストレスチェックの実施、年次休暇の取得促進、学校閉庁日の継続などに取り組んでまいります。今後も、本計画に基づく取組状況を継続的に報告するとともに、学校、保護者、地域と連携しながら、教員が心身ともに健康で、意欲を持って教育活動に取り組めるよう環境づくりを進め、一人一人の子どもたちへの、より質の高い教育につなげられるよう、本計画に基づく取組を着実に推進してまいります。

報告は以上です。

町 長) はい、ありがとうございました。

この報告につきまして、皆様からご意見を伺いたいと思います。何かございましたら、どうぞよろしくお願いいたします。

ちょっとすみません。細かい内容なんですけど、先ほど、業務負荷の件で、不祥事とありましたよね。1枚目ですね。不祥事というと、何か職場の起因する、全般的に雰囲気による不祥事というようなニュアンスが多いと思うんですけど、多分、1事件だと思うんですよ。個人が。発生した事件というほうが、ピンポイントな1人の問題という印象になるような、印象の問題なんですけどね。不祥事というと、本当に何か学校が悪くて、その結果生まれてしまったみたいな印象があるんですけど、私はそっちのほうがいいんじゃないかなと思っています。今後は、これはこれでいいんですけど、今後の資料のときに教員による事件と一言言うだけでいいんじゃないかと。

皆さんいかがでしょうか。はい、清水委員、お願いします。

清水委員) ありがとうございました。

単なる時間だけの削減ではなくて、いろいろな試みで業務の負担を軽減するというのが、学校視察へ行きましても、非常に考えられたと感じられているこの一、二年とっております。この削減されているデータ、すごく活用できるものだと思います。今、教員に成り手が本当に皆さんなったださらないけれども、葉山町は今、幸いなことに、教育長をはじめ教育委員会の皆さんのご尽力で、足りない教員がいないということと、あと、町費を出していただいて、町費の教員の方、引退された校長先生ですとかが理科の先生に入っていたり、そういう資金面でも非常に投入してくださっているんで、この数値がどんどん改善されていくと、やはり先生もいい先生、やる気があって葉山町で働きたいという先生が増えてくれると、子どもたちに還元されるので、ぜひこの取組を教育委員会、行政、教育行政と、町の行政が一緒になって取り組んでいただける今の状態を続けていただければなというふうに思います。ありがとうございます。

町長) いかがでしょうか。

鈴木委員) 今、大黒課長が言われたように、現状の、県内もそうなんだけど、県と比べてこうなったからこうだって、そんなのあんまり意味がないんだよ。基本的にはゼロにしない。それから長時間の是正についても限りなくゼロに近づけるとか、行政用語を使っている場合じゃないんだよ。まずゼロということを目標に掲げないでどうするの。それからウェルビーイングの 80%以上なんて、100%にしないといけないんだよ、本来は。

やっぱり教員のこういうことを進めていかないと駄目だなと思っているのが、平均上昇率が、神奈川県に至っては 2.何%だったと思うんだな。多分大黒課長たちが、恐らく、教員試験を受けたときに倍率が十数倍あったはずですよ。今、十数倍なんて、もう雲の上の話でね。これじゃあね、いい先生は絶対できない。いい先生ばかりにはならない。

企業に至ってはね、今、何万という人間がコンピュータではじかれて、企業のところの試験に来られるのが 200 人とか 100 人。この時点でもう 300 倍とか 400 倍とあって、すごい人数なんです。当然いいのを探る。それで教員になりたくないのかと思ったら、やっぱり教員資格を取りたい人はたくさんいらっしゃる。でも最終的に教員にならない。ここのところのギャップをね、ここに上がっているこの業務管理その他も含めて、今の若い子どもたちが、教員の魅力というものを感じないということが一番大きな問題なんだろうと思うんですよ。

これから 50 年たったら、自分は、ホワイトカラーはブルーカラーと逆転するような時代が来ると思う。そのときに教員とか公務員というのは、私からすると、おいしい話でなきゃいけないんですよ。それでも教員の競争率は上がってこないという現状を考えたときに、やっぱり何が原因かといったら、家庭のご両親と相対峙する

のが得意じゃないんだよね。そういうトラブル、いわゆる学校で処理できなくなり
そんなものについては、いきなり弁護士を入れるとっていると、これは非常に大
きな問題になっちゃうんですよ。だから一旦、教育委員会で、まずそれを処理をし
てあげる、そういう部署があって、今、町長も含めて、学校長が教育でということ
で入ってきている元校長、3人もいますよね、今ね。私と同じぐらいそういう処理
は慣れているし、できると思うんですよ。もちろん忙しいと思うけど、学校の教頭
から比べれば時間あると思うんですよ。そういうものをいきなり弁護士で持ってい
くんじゃなくて、そういう、内に部署をつくって、そこで一旦対応すると。そうい
う部署をつくってあげることによって、何とか教員がさばっていくわけですね。で
もね、教師はやっぱりそれは慣れていないんですよ。そういう経験則、足らないの
で。そこがね、僕は一番教員になりたい理由なんじゃないかと思う。やっぱり
子どもが好きで、子どもをきちんと育てたい、いい勉強を教えたいという気持ちは、
恐らくみんな教員は持っている。だけどその対人関係だけは苦手という人は、学校
長だけでなく担任の先生がみんな参っちゃうんだよね、大体ね。その改善を、
この内容だけではちょっと不十分なのかなというふうにちょっと思ったので。ぜひ
検討してほしいということと、目標値を挙げる場合には、全て 100 か 0。そのぐら
いの気持ちで目標値を考えるべきなんじゃないかなというふうに思います。

以上でございます。

町 長) ありがとうございます。どうぞ。

学校教育課長) 今の鈴木委員のご意見について2点。

まず教員不足に関しましては、葉山町としてもそれは感じているところです。特
に中学校の特定の教科に関しては、県に新採用の要望を出したとしても、県全体で
必要数を確保できないという状況があり、要望しても配置がないという状況がござ
います。また、臨時的任用職員についても、なかなか人がいないという状況の中で、
ただ葉山町がありがたいのは、先ほどおっしゃっていただいた一度教員を辞めた先
生方も、もう一度また葉山のためにということで、ご協力いただいていることで対
応できている状況は、非常にありがたいと思っています。

また学校でのトラブルに関する相談に関しては、今、研究所の加藤先生がその役
割を担ってくださっていて、各学校管理職に対し、毎月学校を回りながら、管理職
が学校での対応で困っていることに対して、相談に乗り、助言をしていただしてい
るところです。町として、そういうポジションを配置していただけているところに、
ありがたいと思いつつ、この場でお伝えさせていただきます。

町 長) ありがとうございます。他にいかがでしょうか。下位委員、お願いします。

下 位 委 員) ウェルビーイングですが、働きがいがあるというふうに考えていらっしゃる方が、
今、ここに出していただきましたけれども、逆に見ると、中学校の 42.5%の人が働
きがいがあると感じていないのかなというのはちょっと問題があると思っています。

普通の会社であれば、やりたくない、やらされているとか、面白くない業務をやらされているという人もいらっしゃると思うんですけど、学校の先生に関しては子どもたちを扱っているので、やりがい、働きがいがあると思っていない人は望ましくありません。誰がそういう方なのか分からないですけど。これは 100%にぜひ近づけていただきたい。辞めさせてではなく、やりがいを感じていただけるように、恐らく若い先生方とか、中堅の方々がもしかしたらそう考えていらっしゃるかもしれないので、そういうのはもっと年配の先生方が、いやいや、これが醍醐味だ、教師の醍醐味だよということを、ぜひ教えてあげてもらいたいと思いました。

あと時間に関してなんですけども。見えていない働き方をしている方がいらっしゃるんじゃないかなという。これは我々の民間企業でもそうなんですけども、タイムカードを切ってから働く人とか、やっぱり一定数はいると思うんですね。最近、大きな会社、IT系の会社なんかだと、6時過ぎるとインターネットがつながらなくなるとか、オフィスの電気が勝手に消えるとか、そこまで学校はできないと思うんですけども、ある程度強制力を持って働かない時間をつくってあげるということも必要なかもしれないというふうに思いました。

中学校に関して、やっぱり部活動が非常に大きな内容を占めていると思いますので、タイムカードだけだと、週末働いている時間ってよく分からない。試合に一緒に行っているとか、そういった時間も含めると、きっとすごい時間働いている方もいらっしゃると思うので、そこをちょっと見てあげてほしいなと思います。部活動の地域移行は現実にはやらなきゃいけないことだと思うので、これも進めていただきたいと思います。

あと学校視察の際にちょっと気になった話があったんですけど、持病を持っている先生が何人か町内にいらっしゃるじゃないですか。私もよく知っている先生なんですけど。すごく一生懸命やっていたら先生でいい方なんですけど、治療を積極的にうけてないというお話を聞きました。それを、もちろん教育委員会や学校が強制することはできないわけなんですけども、民間の我々の会社ですと、そういった方がもし分かれば、もちろん個人情報なので、ご本人からそういうお話があればなんですけれども、例えば配置転換をするとかと、病気を治す方向に持っていくということもあるんじゃないかなというふうに思いました。学校に関しては、配置転換はなかなか難しいと思うんですけども、そういったケアも今後はもしかしたら必要なかもしれないというふうに思っているところでございます。

以上です。

町 長) ありがとうございます。

よろしいですか、大黒さん。他の委員、いかがでしょうか。小峰さん、お願いします。

小 峰 委 員) ありがとうございます。

今、下位委員もおっしゃったように、私も県よりはね、働きがいがあると感じている教員が、葉山町は多いというのは分かっているんですけども、やっぱり 40% 近くの人、以上ですね、40%以上の方はそう思っていないということ、別に葉山だけじゃなくても、県全体もそうですし、教員という仕事を、働きがいがあると感じていない人が少なからずある。少なからずというか、かなり多い割合であるということ、どういうことなのかなというふうに思いました。それがまず一つ。

それから、私の聞き方が悪かったのかもしれないんですけど、葉山小学校をモデルにして、業務改善手法を取り入れて、いろいろとやってきた。まだ途中なのかと思って大黒課長のお話を聞いていたんですけど、資料によると実は今年の3月で一応、プランが終わっているのですよね。やってきたことが。学校教育課長）これは今年度の取組になります。今まさに。

教 育 長） 表記が1年ずれて。今やっている最中なので。これは表記ミスです。

小 峰 委 員） この、あれしている。

教 育 長） 26年の6月から27年の3月までなので、ちょうど始まったところです。

小 峰 委 員） これ、このところ26年の3月までと……。

学校教育課長） すみません、表記ミスです。大変失礼しました。

小 峰 委 員） そういうことなんですか。だから終わっているのかなと思って。葉山小学校がどんな結果を出したのかということのを伺いたかったんです。

それから、教員がやるべきこととそれからそうではないこと、手助けをするという事柄で、これから大事なものは、教員が本来やるべきことがどういうふうに位置づけられるのか。よく話題になって、鈴木委員なんかがおっしゃっているんですけども、例えば、成績処理というか、親に出す通知簿、あゆみ、そういうものについてのコメント欄を不要だということなんですが、私などはそうは思っていない。あれこそ大事な保護者とのコミュニケーションツールの一つだと思っているので、その辺りの検討をこれからどういうふうにしていくのかということが、とても大事なことです。それに時間を取るということは、本来やるべきことなので、時間を取って当たり前だというふうに思っています。そうじゃないところで、いろいろな試みで減らしていращやるところもあったので、それはいいとして、今度の検討していく上では、その本来やるべきことにどれだけ時間をかけられるか、どういうことに時間をかけていくのかというところの精査、期待することということは、しっかりと検討していただきたいなというふうに思いました。

質問としては、その働きがいがないと感じているのが40%以上、さっき下位委員もおっしゃっていたんですけど、それを例えば課長だったら、どんなふうに捉えていращやるのかということも伺いたいと思います。

町 長） お願いします。

学校教育課長） 先に、大変申し訳ございません。資料、こちら記載が間違っております。2026年6

月から2027年3月までの取組となります。大変失礼いたしました。

まず、やりがいの部分につきましては、私もそうですが、葉山の先生方、教員という仕事にやりがいを感じてくださっていると思っています。ただ卒業式の場面とか、とても感動した後で教師になってよかったなという場面もあったり、このストレスチェックを取った際に、例えば保護者と何かトラブルを抱えていれば、自信を持ってやりがいがあるとは答えられない状況などもあるかと思います。この結果が年間を通してというか、そのストレスチェックを実施した瞬間での感情というところも加味しなければならないと思っています。ですので、葉山の先生方については、働きがい、やりがいを感じてくださっていると信じています。

もう一点、通知表の件に関しては、それは先生方によっても考え方があると思います。ですので、私たちが教育委員会として、学校の働き方改革のためにやらなければならない取組もあると思いますし、校内で先生方同士で対話しながら、通知表のコメント欄についてどう捉えるのかという、学校の中で働き方改革ややりがい、子どもたちのことも考えながら決めていくこともあると思いますので、通知表のコメントなどは、各学校で先生方自身が答えを見つけていっていただけたらと思います。

小 峰 委 員) 私はただ、ああいう通知表のコメント欄は一つの例であって、それをどうするかということではなくて、何を本当に教育の本来の目的として、教師がやらなければいけないかということは、やっぱりみんなで共通理解を持たないといけないなというふうに思って申し上げたことですし、先ほどの葉山の先生方が、課長がおっしゃることには、ほとんどの方はやりがいを感じているけれども、たまたま調査のときにはそうじゃない思いもよぎったりするので、働きがいがあるに丸をつけられなかったということなんでしょう、そうやって見るとね。教員全体という、それもやっぱり40%、50%近い方があまりやりがいを感じられないのは、そういう何か、ぱっと思いついたことで、もう自分のやりがいを損ねるような思いがよぎるからなのかなということ、やっぱりそうだったら、何か根本的にやりがいを感じられないようなことは日常的にある。あるというか、もちろん人間だからね、左右はすると思うんだけど、トータルしたときに、やっぱりこの仕事ってやりがいがあることじゃないなと感じる人がいるということは、基本的にはどういう事象を先生方は思い浮かべているのかなというふうに思ってしまったので、質問させていただきました。

鈴 木 委 員) 大黒課長の話だったらさ、そういうふうに思っている人が多いというのを信じているわけだけど信じちゃ駄目だよ。データが出ているんだから。教育長を見ている、僕らの時代、教員というのはね、やっぱり尊敬されて感謝されるんですよ。普通は。そこへもう一回原点を戻していかなきゃいけないので、やりがいがない人を雇ったってしょうがないんだ。やりがいがないんだったら。それと教師の場合、答えが出ないようなものだから、教師は、何度も言うように、やっぱり尊敬され、感

謝される仕事なんだということで、ぜひ理解していただきたいなど。そのために教師をやっている方も、それが目的じゃないと思うけど、結果そうなるんだということなんじゃないかなというふうに思っているんでね。ひとつよろしくどうぞ。

下 位 委 員) 私からも補足して。

ぜひ、この3月くらいからいただいてもいいかなと思いましたけど。ただ、僕らが学校に行って、先生方の話を聞く機会もあるじゃないですか。決してやりがいを感じていない人はいないなというのが正直な感想です。もしかしたら一部いらっしゃるかもしれないですけど。いや、この人は明らかにやる気ないなという人は見たことがないので、なのでそこはあまり心配はしていません。だから、この職場でも、それでも去る人は毎年いらっしゃるわけなんで、そういう方はそうなんでしょうけど、なかなか年度の途中で辞めにくい職場ですよ。夏休みが終わったら先生辞めちゃいましたってなかなか難しい。そこはちょっと特殊な事情があるかもしれないですけども。もしそういう方がいらっしゃれば、気づけばフォローしてあげていただきたいと思います。よろしく願いいたします。

教 育 長) まずは、どちらかというと、さっきも言いましたけど、ポジティブ系なので、データも全てポジティブに感じる人間でありますので、そういう意味でも話をさせていただきますが、まず県内のところの部分で、これは県の幹部の連中から最初から言われているんですが、葉山が何でこういうふうに業務量についてもスコアがよくて、ほかのところと比べるといいのかというのを教えてくれと、よく言われるんですけど、そんな簡単には教えてあげませんと言うんですが。

それなりに、そこにはやっぱり個別の取組があるというのが事実で、例えば、生涯学習課がずっとやってきてくれたことですが、学校運営協議会が本当に地道に地域とPTAといろんな人たちが、学校を地域の一つの本当に核として考えてくれているものが、継続的に嫌にならずに、ずっと楽しみながら取り組んでくれているというのが、教員にとっては、結果的には非常に役立っているというのは事実です。午前中にちょっとこの話をしたかもしれませんが、十何年前になりますかね、文科省がいわゆる学校運営協議会をつくるといったときには、学校はすごくこれを嫌なものだと考えていたんですね。文科が示したのは、大体、今どこのところも学校運営協議会もやっていないですけども、学校運営協議会自身が教員の人事まで介入するという言語がそこにありました。言葉があったので、教員は、一体全体何をしたいんだという話のところから、多くの自治体、多くの学校が学校運営協議会の設置を非常に嫌がったんですね。ただ葉山についてはそのところをうまく、本当にいろんな形で、先生たちの悩み事を相談できる地域の優しい人たちなんだということをようやく理解してくれたところからスタートしたので、先生たちもいろんな意味で助けていただいているというのが、時間の短縮になっているのも一つの事

実です。

当然ながら学校教育のところでも、それから町長にも毎年毎年財政面のところでも、理由を明確にこちらのほうからもお伝えしながらですけれども、様々な形で人的な資源、それからソフトウェア、アプリケーションを含めいろんな形のご協力をいただいているのもこれまた事実です。これは教員にとってあまり見えないところですが、気がつくと、相当そこについては教員の管理業務、業務のところの軽減には役立っているのは、大黒課長が言ってくれたとおりです。

さらに教育総務のほうのところでも、確かに様々な形で校舎は老朽化していますので、修繕をしなければいけないところだったりがいっぱいありますけれども、それでも、何かあれば一生懸命そこに取り組んでくれるというところの部分があるので、教員と教育委員会がぶつかる場面がほとんどないんですよ。これも非常に管理職にとってもありがたいので、先生たちも言えばやってくれることが相当あるんだということを理解してくれているのは非常にありがたい。つまり簡単に言うと、組織論として、しっかりと学校と教育委員会がいろんなことを実は複合的にやっている中のところで、この業務量の調査のところでいいスコアが出ているということ、こういうことがあるので、そう簡単に言葉で言っても、県の幹部は分からないと思いますので、そう簡単に教えてあげませんと言っているのはそういうことなんですけれども。

これも含めて、鈴木委員とかがおっしゃるとおり、目標値は当たり前の話で、残業、長時間勤務はゼロにすべきだ。これは当たり前の話です。さらにウェルビーイングの向上 80%以上というふうに書いてあるんですが、これも葉山町が単独でつくったわけではなくて、県がそもそもこれを型枠としてこれにしてねといったところからスタートしているもので、まずは目標値としてこれにしましょうという話はあります。ただ文言については、非常に先ほどから話が出ているウェルビーイングの向上とやりがいというのはイコールではないので、言語としておかしいんですよ。なので、これ、どういうふうに考えているのかということも明確にしていかなないと、ウェルビーイングの向上がどうですかと本当に聞いているんですかということですね。やりがいがありますかと聞かれて、そのやりがいというのも、教師としての仕事にやりがいがあると聞いているのか、教師としての職務それから業務として、それから社会的ないろんな様々な問題としてやりがいを感じますか。聞かれるものによって全然これは違ってくるんで、これはもうちょっと整理しなきゃいけないというふうに、私は県の委員でもありますので、今度言っておきます。その辺のところはしっかりとやっていかないと、このスコア値をどうやって上げるのかというのは、やっぱりなかなか難しいところがあると思います。ただスコアとして、これはデータになりますので、当たり前の話ですが、繰り返しになりますけれども、目標値に確実に4年間で達成するという気持ちは当然持たなければならないだろう

なというふうに思っております。

それから、中学校におけるところは、やはり一番の問題点は、これも県にいつも言っていますが、部活動をどういうふうにしていくのかが、広域自治体の神奈川県にとってみると、基礎自治体の様々な事情がやっぱり明確に理解できていないところがやっぱりあるんですよね。ですので、うまくいっているというふうに表面では言っている自治体もあるんですが、当該自治体に話を聞くと、うまくいっているとは言わないんですよ。となるならば、広域自治体の神奈川県がもっと違った施策を打たない限り、中学校教員の多くのところで時間を食っている部活動の負担は、今の段階では減りようがないんですね。ただ、委員さんたちも、文科省のところの研修会に年に1回ぐらいずつ出ているので、特に地方の先進的な自治体は、全く教員のところから、当たり前の話ですけど、部活動というところの文字を取ってしまっている自治体が結構出てきていますよね。それは一体何をしているかというと、やっぱりある意味では、基礎自治体あるいは広域自治体として相当な覚悟をもって、中学校から部活動の土日の指導、それから平日の指導も全部止めるというところの物言いをするだけの、教員が納得してくれるだけのところの施策を明確に打つということが必要になってくると思います。これはどうしていくのか、また今後の神奈川県の問題だと思います。葉山にとっても大きな問題で、今、部長から話を聞いているところでは、ここに書いてあるとおり、着々と話が進んでいるというふうに聞いておりますので、もしかすると部長に聞いてもらったほうが現実には分かるかもしれません。

それから、いわゆる鈴木委員から、教育長も事件好きだろうというふうに言われましたが、事件が好きというよりは人好きというぐらいな感じにしておいていただけるといいかなと思いますけれども。誰かが何かをしていくときに、やっぱりこれ普通の学校でいくならば、個人の担任団のところではなかなか収まらない状況のときには、管理職はそこを請け負うのは当たり前の話ですが、課長とよく話をしているのは、当然、管理職は私どもが信用しているところではあるんですけども、あまり無理をするなというレベルのところでは考えています。あまり無理をしていて、そこに集中されても、学校は全体で動いていますので、そうでない形のところでいっぱい力を使うのであるならば、早めに相談をしていただけるとありがたいという話をしていますので。そうすると、先ほどのお話のとおりで、事件好きな人間が何かうまくやるとそういう話になるんですよね。だからカリ先生もいらっしゃいますし、当然私のほうもそれなりに、いろんなところの各方面のところの知り合いがおりますので、それなりに動くことは可能だと思っていますので、そこは何とかしていきたいと思っています。

それから、先ほど年度が間違えていて申し訳ございませんでした。ユーレカにやらせている、これ民間のところですけども、始まったばかりです。葉山小学校を中

心にしながら、余白をどうつくるかというところに取り組ませようという話です。最後の話ですが、簡単に言いますと、文科省も、これ午前中にも話をした、来年度以降からもう本格的に葉山も取り組むであろう全体の調整時間をどうつくるか、つまり1時間の余白を、毎週の28こまの中を27こまにするためにどうしていくかというところが、実は非常に大きなウェルビーイングを生むための、あるいは子どもたちの授業に関してのところの理解度を上げるために非常に重要だと思っています。これ本当に申し訳ないんですが、私本当に、高校の教員なので、小学校の先生たち、あの時間を、全く自分の時間を取れない日々というのは理解できないんですよ、ほとんど。あれだけのことを、来たときには、28時間のうちの26時間、7時間をやっているのが当たり前で、週のうちに空き時間が1時間あるかないかですと言われたときに、ひっくり返ったんですよ。それで授業ところの準備なんかできるはずがないですね。だから、小学校の先生たちは指導書が欲しいというふうに言うんですよ。指導書には、安直ですから答えが書いてあるんですよ。それをそのままやっていれば、決していい授業になるわけがないですね。なので、そうではなくて、今現在、様々な取組で、今お話ししませんけども、ほかにもいろんなことをやっていますんで、その中で、今は小学校の先生の週アベレージは28こまあるうちの中、少ない先生は19時間です。多い先生でも22時間ぐらいです。となるならば、6年前と比べると、少なくとも多い先生でいうならば、それこそ七、八時間減になっているんですね。少ない先生でも6時間ぐらいは減になっていますので、それが簡単に言うと、余白を生んでいるんですよ。その余白はどこに使っているかという、教材研究かもしれません。先ほどの大窪先生たちがやっているようなところで、そうだよねと言えるような時間がそこに生まれているんだと思いますし、もっと言うならば、その時間に全時間でやっていたときの様々な子どもたちの様相を自分の中で思いめぐらすとか、そういう時間も出てきていると思うんです。それが結果的には、残業をしなくていい時間になりますし、さらに言うならば、ウェルビーイングにつなげていくためには、非常に教員の余白を生むのは本当に重要だと思っています。そういう中で、これから先に葉山町としても、より調整時間を、来年度、今年の秋には校長先生たちには何とかしなさいという話をしているわけですが、来年度以降のところ、より葉山町が神奈川県内の中で本当に先進的な教育をやっている、その背後には教育環境の整備があるんだということを理解していただくのが本当に重要だと思っています。そういう中で、本当に事務局で、町長にもご理解いただきながら、いろんな形のことをさせていただいていることというのを、本当にさらに外に発信ができるとよりいいかなと思ってお話を伺っていました。

目標値は高いところを持ちたいと思いますので、今後、様々まだまだ取り組むことはあると思っていますので、やらせていただければありがたいかなと思います。

以上でございます。

町 長) ありがとうございました。
すみません、私から全然違う面で、この資料というのはどなたがどういうふう
作ったのか。これは大黒さんが集めた感じですよ。

学校教育課長) データを集めて読み原稿を作り、それをA Iに読み込ませて作成しました。

町 長) N o t e b o o k L M って右下に入っているじゃないですか。これはどこかの、こ
の会社絡みで誰かが作ったんですか。

教 育 長) G o o g l e W o r k s p a c e の中で提供されているプレゼンテーションを
作成するソフトに近いです。

町 長) で、大黒さんが作られた。

学校教育課長) はい。読み原稿を読ませたら、こういう形で作ってくれて、一部ここのところが
ユーレカトキーからいただいた資料です。

町 長) 最後そこが違うんですね。

学校教育課長) ここだけユーレカトキーからもらった資料になります。

町 長) なるほど。はい、分かりました。
例えば、ちょっと小さいことなんですけど、このカテゴリーに深掘りがあります
けど、この前、ページ数がちょっとね、カテゴリー1は……。

学校教育課長) 1が、ここの外部のところ。

町 長) 外部化して前線を守ることがカテゴリー1で、その後、深掘りをしていくことが
カテゴリー2に入るんですね。
その次の次のページ、そもそも次のページ、これがカテゴリー3ということす
ね。その次、D I S C O V E R Y とは、これはユーレカさんの資料ですか。

学校教育課長) はい、ユーレカさんの資料をここに入れさせていただいて。

町 長) 実は、これ私ね、これを見て全然分かんなかったんですよ。さらに日付を間違え
ているのは、これもユーレカさんが間違えたからなんですか。

学校教育課長) そのまま。

町 長) ということですね。稲垣さんの今の話を聞いて、やっと理解できたんです。これ
多分、教員の方向けの資料なんだろうなというふうに思いながら聞いていたんす
けど。
大黒さんご自身、こちらに来て、教育委員会で余白のある仕事はできたんですか。
学校にいる頃は余白のない仕事をしていて、それが多分ルーティーンであり、慣れ
ておられると思うんですけど、教育委員会と全然仕事が違うわけですよ。余白は
ありますか、今。

学校教育課長) 余白があるかという、なかなかありますとは言えない。

町 長) そうすると、学校に戻っても余白って多分つくれないと思うんですけど、今はど
うしてつくれないんですか。

学校教育課長) 自分自身の在り方、まさに今、おっしゃるように、私自身の在り方が、本当にこ

の仕事を楽しんでなければいけないと思うし、余白を持って仕事をしていなければいけないという思い、そうありたい自分もありつつ、なかなかいろんな県教委からの依頼であるとか、突発的な対応とかに追われている感覚は常にあります。

町 長) むしろ余白がないぐらい忙しいことが、学校にいる頃は楽しかったとか思ったことありますか。というか、教育委員会にいらっしゃる先生方、みんな学校現場に戻りたいという、結構言う方多いじゃないですか。これだけ余白がない、余白がない、忙しい、大変という現場に戻りたいというのは何でなんだろうと、この資料で逆に感じちゃったんですよ。

学校教育課長) 今の私は、先生方がまさにこういった余白をつかって、生き生き働いてほしい、そこに願いがあるので、教育行政という立場にいますけれど、当時働いていたとき、学校にいたときは、やはり、自分自身の働き方というよりも、子どもたちが本当に楽しそうにしている姿とか、いろいろ経験して成長していく姿に喜びがあったからこそ、やりがいを感じていたし、その子どもたちの喜びとか成長につながっているなど感じられる仕事に関しては、授業の教材研究なんかは、さっきの大窪先生の発表じゃないですけど、勤務時間を過ぎてやっても、そこには負担感というのはそんなに感じていなかったように思います。

町 長) きっとそれを言語化して表現すると、さっきのやりがい、働きがい、働きやすさという言葉が適切な表現になるんじゃないかなというふうに思うんですね。

教 育 長) 私も教育行政が長かったので、5年ぐらいは、戻りたいなっていうも思っていました。これは単純な話なんですよ。教員って教員になりたいくてなっているんですよ。それでない仕事を強制的にやらされているんですね、教育委員会って。そうになると、こんな仕事をするために僕は教員になったはずではないんだと思うんですよ。でも逆に言うと、それがあったからこそ、今現在の自分もそうですけども、教員のよさというのはそこで客観的に見える機会ですね。ですから、忙しかったことというのも懐かしく思いますけども、じゃあそれが100%、教員だったときにそれを満足していたかという、そうじゃないんですね。違う場に行ったからこそ、かつて自分がやっていたことのよさだとか、そういうのが客観視できるという状況があるので、そのところというのを、学校の先生たちは多くはずっと学校の先生ですから、そのところの客観視って、異動していくことで初めて分かたりとか。ですから、葉山はかつて葉山の中だけで異動があったんですね。ですから、どこに行っても同じようなこと、自分の経験値だけで生きていけたので、不満はずっと不満のまま残って行って、自己完結している状況が多かったんですが、最近は、逗三葉の異動が始まりましたので、違う場所に行くんですね。三浦については全然教育の環境が違いますし、逗子とも違うんですね。それを見た瞬間に、葉山はこうだったよねというふうにして、それをすごく懐かしくよく思ってくれるということが、きっと出てくると思うので、やっぱり人間にとってみると、同じ場所ですずっと同じことをや

り続けていくのが、よほどのそこに必要性がない限りは、やはり慣れていってしまったりとか、それが本当のよさが分からなくなり過ぎることはいっぱい、やはりあるんですよね。私も大分あちこち動きましたので、過去のいろんなところについてのところは、いいものも当然たくさんあったし、足りなかったところもある。町長が言われたみたいに、6年前の27時間授業をやっていた先生が今19時間になって、どう思っているのかなと、比較論は聞いてみたいですけどね。

町長) この余白が、私、プレゼンから理解できなかったんです。余白をクリエイティブにしろと言っていると読めたんですね。クリエイティブにしろって、クリエイティブなんか無理じゃないですか。クリエイティブは365日で、やってくべきことをかなえたい、常に考えていて出てくるのがクリエイティブだと僕は思うんですよ。なので、業務処理を余白でやれというのは分かるんですけど、そのために余白をつくれと言われて、うちではちょっときついなと思ったんですけど。ちょっと今、稲垣さんの話のとおり、業務を処理するための、僕らのための時間のための余白をつくらうよ、何か、というなら分かるなと思って考えたんです。

ということなんですけど、一方で余白というものの価値を理解できているのかなというふうに、大黒さんに聞いたかったのが、大黒さんは余白をつくらせるほうの立場になって、今度、まず現場の話で余白の大事さを分かっているなということ、今の話ね。余白があることで、ちゃんと余白をつくるんだと思わないと、溶け込んでいっちゃうので。なので、OA化しても溶け込み、IT化しても溶け込み、結局スペースがないとか、仕事が相変わらず忙しい、まさにこれが事務方も一緒なんですね。先生方がその余白の価値を理解してくれているのかということと、大黒さん自身が、今の仕事を余白をつくって、俺はどんなところに行っても余白をつくれる人間なんだと思って先生方に話してくれないと、伝わらない。大黒さん自身が余白があると、多分このプレゼン資料を事前にチェックする余白があると思うんですよ。なので、それこそが、すみません、ちょっと引き合いにして申し訳ないんですけども、忙しさを象徴しているんだなと思って。この資料自体に、いろんな意味では学校の先生たちの悩み、苦悩が織り込まれているなと思って、今日、今、話を聞いてまとまってきたんですけど、自分の中で。

ぜひもっとう、一方で先生たちって、私は以前、これだけは拭えないのが、部活が外部化されちゃったから先生辞めましたといって、面接を受けにきたやつがいるんですよ。もちろん落としたんですけど。そこはやっぱり先生としてやりたい、部活がやりたいと思ってやってきた人たちにとっては、こうやって余白がつけられることが逆に残念だったりとか。それで、あとばーんと切られたら涙を流すやつもいるかもしれませんし。それが果たして正しいんだろうかということですけど、一方で酌んであげなきゃいけないと思うと、さっきのやりがいのこの指標は非常に危険だなと思って。やりたいをやるのがとても大事だったりすることもありますし、

なんですね。ぜひ、私はちょっと分かり得ない分野なので、いろんなところを総合的に見た、フォーカスした中でのアプローチができていくように、大黒さんの要求には非常に重いものがありますけども、ぜひ頑張ってほしいなと思いました。

最後には、一つだけすごく個人的な話なんですけども、私はさっき小峰先生がおっしゃった、先生からのメッセージ、これは一生忘れない言葉をずっと小学校の頃にかかれたことがあるんです。私、しゃべるのが早いんですね。小学校6年生の先生のコメントに、しゃべりの速さと頭の回転の速さに脱帽という3行が書いてあったんですよ。これは褒めているのか貶しているのか、いまだに分かんないまま、今、49になっているんですけど。忘れないですね、やっぱり先生のコメントというのは。

私は、大学で教えるときの生徒たちにコメントを書くようにすることがこの子のためになると思って頑張っているのは、きっと同じ気持ちで、私も理解できるようになったんですけども、こうやってやっていたら自分のこともあるので、何かこの先生という仕事のその崇高さを、一般的な事務所、業務職、一般的な職業ではないところというふうに、私は政治職にて、ちょっと特別な職業だと言われるところがすごく多いんですけども、そこまでいかないにしても、やっぱり先生という職の大事さというのを、もう少し何かできないものかなというふうに。すごく一般化しようとしていますよね。先生という職業。一般化じゃいけないようなところを、何かうまく表現しながら戻ってきてほしいなというのが思っているところです。

教 育 長) おっしゃるとおりですね。専門性ですか。

町 長) 専門性であり、でも一般的な専門じゃないですかね。思いのある専門なんですよ。

教 育 長) なので、前にこの話は小峰先生としましたが、義務教育においてはすごく重要な価値があるということですね。高等学校におけるところでは、下手に物を書いたものを、それを高校生が理解しようとするかという、そうでもないんです。なので、そこはやっぱり成長の度合いによって違うので、小学校と中学校においては先生たちとのコミュニケーションと、最終的に言ってもらった、書いてもらった一言が影響する可能性が非常に高いですね。ですから、そこも含めて小学校の先生、中学校の先生、自分たちがどういうふうに子どもたちにどう関わっているか、どういう影響を与えるかというのをしっかり理解した上で、それこそ余白をうまく使ってもらえるといいですね。

町 長) ありがとうございます。すみません、私の取り留めのない話に付き合ってくださいありがとうございます。ぜひ葉山に限っての、多分これは葉山はいいんだと言いたかったんですね。

学校教育課長) 今のお話を聞いて最後に言葉を残したいなと思ったのは、葉山町の成人式って、先生が来たときに、子どもたちみんな覚えてくれていて、教員ってやっぱり、いつまでも人の心に残る仕事、今のお話も、本当にとってもすばらしい仕事だなと改めて

思いますし、学校がすごく好きなので、こういったことに取り組みながら、先生たちのそのすばらしさ、教育という仕事に携わるすばらしさを葉山からしっかり発信していきたいということを改めて思いました。ありがとうございます。

町 長) 皆さんほかによろしいですか。

では、協議事項の(2)につきましては以上で終わりたいと思います。

(その他)

町 長) (3) その他ございますけども、何か皆さんからその他ございますか。

事務局からはよろしいでしょうか。

では、特にないようですので、協議事項に関しては以上で終了としたいと思います。では、事務局にお返しいたします。

教育総務課長) ありがとうございます。

それでは以上をもちまして、令和8年度第1回葉山町総合教育会議を閉会いたします。

次回の日程は決まり次第ご連絡いたします。

時刻は15時52分です。お疲れさまでした。